

ここすき！特別企画 幼稚園に行ってきました！

国立音楽大学附属幼稚園 幼稚園訪問インタビュー

国立音大附属幼稚園は、1950年に、国立市で初めての幼稚園として創設され、来年70周年を迎えます。初代園長は、『窓際のトットちゃん』で知られるトモ工学園の設立者、小林宗作先生です。その自由な教育理念は、70年を経た現在も健在です。

国立駅から徒歩2分の場所にあり、外側から見ると、コンクリートの建物に囲まれています。が、一步園庭に足を踏み入ると、そこにはシンボルツリーの楓をはじめとして、たくさんの木々が生い茂る別世界が広がります。

シンボルツリーの楓→



3つの特長

- ・自我の形成期を大切にする保育
- ・総合リズム教育による心身の感覚機能を助長する保育（リトミック）
- ・自然との対話をとおして生きる知を育む保育

豊かな自然環境は、好奇心旺盛な子どもの遊び欲求を満ち、子ども自らが考え、試し、工夫しながら多くのことを学んでいます。仲間と共に汗を流して労作する生活は、自立と共に、他者と共にある喜びを育てていきます。

自我形成の重要な時期である幼児期、音楽を通して一人一人の感性を育て、自分の意志や言葉を、体全体を通して自らが表現する楽しさを味わうことを大切に育てています。自由教育の真髄を実現するため、音楽の専門性の高い教師がチームで保育を行っています。

今年度から就任された林浩子園長先生は、今、ここに集まる子どもも、保護者も、教職員みんなが幸せになる幼稚園を目指したいと話します。

園の自慢は、大学の附属の利点を活かし、多くの人・もの・こととの出会いを作っていけることです。大学と連携して、子どもの発達研究や音楽開発を行い、幼児音楽教育専攻の学生の実習の場でもあります。附属間の交流、連携も盛んで、例えば、附属小学校5年生と年長児との絵本交流会では、小学校の図書館で年長児が借りた本を5年生が読んでくれたり一緒に遊んだりすることで、入学後は1年生と6年生の自然と良い関係が生まれていきます。小学校の体育の先生が幼稚園に来て、逆上がりや運動遊びを指導してくれたりします。大学生や高校生がボランティアとして幼稚園に来てくれ、双方に良い出会いや影響を与えてくれています。

幼稚園の園庭には、びわや梅などたくさんの木が茂り、子どもたちがもいで食

べたり、梅ジュースにして飲んだり、自然の恵みをいただいています。小さな川には、メダカやアメンボが泳ぎ、ちょろちょろと流れる水の音を聴いているだけでも、心地よくなります。砂場の遊具も、大学の竹やぶから竹を切ってきた竹筒や木片、丸太など、木のぬくもりが感じられる遊具が揃っています。

また屋上では、菜園で大根やさつま芋を収穫し、みんなで味わったり、中央線の電車を間近に見ることができたり、遠くに富士山も見えるなど、憩いの場所になっています。



園児たちは、国立市内はもとより、練馬、杉並、八王子などからも登園してきています。園バスはありませんが、登降園の時間は親子で手をつなぎ、いろいろな会話を楽しんだり、公共のマナーを学んだりする機会として、大切にしてほしいと考えているそうです。

プレ保育や、園庭開放等も実施していますが、子どもといることが楽しく、子育てに喜びを感じてもらえることこそが子育て支援だと考えています。今のお母さんたちは、“子どもを泣かせたら、虐待と思われるのではないか？”“保健所で、いろいろ問題を伝えると問題児扱いされてしまうのではないか？”など、子育てに息苦しさを感ずる側面もあると言います。母親は子どもを命がけで生み、必死に育てています。子ども自らが育つ力があるように、母親の持つ力を信じて、子育ての悩みに寄り添いながら、子どもの幸せを一番に考える子育て支援を行っていきたいとおっしゃっていました。

→ 園舎の屋上
さつまいもや大根の栽培
ができる畑とプール



園長先生は、絵本の講演をよくされていますが、親子で一緒に絵本を読むことは、親自身が子どもの頃を振り返り、子どもを再認識するなど、大人にとっても意味があると言います。中川李枝子さんの処女作『いやいやえん』で描かれている、“子どもは子どもらしさが一番という子ども像”からは、子どもをゆっくり、ゆったりと育てることの大切さを教えてくれるそうです。

市に期待することは、子どもは泣いて当然だよという周りの優しいまなざし、子どもが泣いていたなら誰かが声をかけてくれるまち—子どもの最善の利益を大切するとともに、子育てが楽しいと思えるような環境づくりをお願いしたいと話されていました。また、国立市が、幼稚園、保育園の枠を越え、国立の子どもの育ちを皆で考えていこうとしていること、子育てがより良くなるよう様々な政策を行っていることなどを、もっと発信していくべきです。それが、子どもたちや保護者が、国立で大きくなっていくことの安心感や、喜びにつながっていくと良いですねとの力強い言葉をいただきました。

「先生のご趣味は？」の質問に、今は、午前は幼稚園、午後は大学で、多忙な毎日ですが、唯一、愛犬と一緒に過ごすことが楽しみだと話しておられました。

園長先生が、最後に小林宗作先生の“ゆりかごをゆする手は、やがて世界をゆする手だ！”という言葉を紹介してくれました。保育者としてのプライドを持って保育をするように、との強いメッセージがこめられています。あの戦争の時代に、自由な教育ができたのは、国からお金をもらわず、自身がやっていた保母養成学校の貯えを、トモ工学園の教育にまわせたからとのこと。小林宗作先生は、日本の幼児音楽教育の礎を築き、多くの保育者を世に送り出しました。小林宗作先生の子どもや教育への熱い思いを大切に受け継ぎ、音大附属幼稚園の持つ様々な大事な使命を、もっともっと発信していかななくてはいけないと感じていると話されていました。



↑子どもの幸せについて熱く語ってくださった 林浩子園長先生



↑子どもたちが使いやすいように工夫されたタオルは保育士の手作りです。



↑大学にある木を切って作った砂場の遊具

※幼稚園のホームページは市役所ホームページからもご覧になれます。

国立市ホームページ→子育て支援ページ→子どもを預ける→幼稚園→国立市幼稚園等一覧